

# 平成8年度 和歌山県文化功労賞

ひがし よう いち  
東 陽 一

住 所：東京都調布市

出 身 地：和歌山県海草郡野上町

生 年：昭和9年

## ◎業績及び経歴

昭和29年和歌山県立大成高等学校卒業後、早稲田大学文学部にて同人雑誌等を通じて文学活動を行っていたが、次第に映画に傾倒。

卒業後、岩波映画製作所にて助監督として主に記録映画の分野で活躍したが、文学を志した感性を活かした劇映画製作に歩むため独立し、昭和38年初監督作品として「A FACE」を発表し好評を得る。

その後も斬新な作品を多数発表し、昭和53年の「サード」で芸術選奨文部大臣新人賞・ブルーリボン賞を受賞し、実力・キャリアとも日本を代表する映画監督としての地位を確立した。

昭和54年「もう頬づえはつかない」（毎日映画コンクール優秀映画賞）、昭和55年「四季・奈津子」、昭和56年「ラブレター」、昭和61年「化身」、平成4年「橋のない川」（毎日映画コンクール監督賞）等の作品を発表した。

平成8年には、カンヌ・ベネチアと並ぶ世界三大映画祭であるベルリン国際映画祭において「絵の中のぼくの村」が少年期の感受性を独自の視点で描き静かなユーモアと深い英知を湛えた作品として高く評価され、ベルリン市の紋章である熊を模した銀熊賞を受賞した。

氏は、日本映画界を代表する映画監督であり、その創作活動をとおしての映画文化・地域文化に対する功績は多大である。

## ■主な表彰歴等

昭和46年 日本映画監督協会新人賞

昭和53年 芸術選奨文部大臣新人賞

昭和53年 ブルーリボン賞

昭和54年 毎日映画コンクール優秀映画賞

昭和62年 和歌山県文化奨励賞

平成4年 毎日映画コンクール監督賞

平成8年 ベルリン国際映画祭銀熊賞